
僕の知らない世界にて

枯れた樹海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の知らない世界にて

【Nコード】

N6276X

【作者名】

枯れた樹海

【あらすじ】

神によって少年はリリカルなのはの世界に転生した。自分が知らない世界で彼はどう生きるのか。

作者はこれが処女作です。文才もあるわけがないので、駄文で、表現の間違が多いと思いますが、最後まで見守っていただけると幸いです。

あと、原作ブレイク、ハーレム、チート、キャラ崩壊などが嫌な方は読まない方がいいかと思います。

なお、誤字や脱字、表現の間違い、矛盾などは連絡がありましたら直しますのでよろしくお願いします。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

リリイ・ナイトメア

年齢

7歳

性別

男の娘

身長

ヴィータより少し低い

体重

ヴィータより少し軽い

容姿

Fateのセイバー

魔導士ランク

SSSランク（OVL時はEX）

神からもらった主な能力

・テイルズオブシリーズに出てくる術技・秘奥義を全て使用可能

全てを使用可能とあるが実際はその技を登録しているデバ

イスを使わないといけない為、全ての技を使用できるといふ訳ではない

・全て遠き理想郷^{アウアロン}

Fate に出てくる宝具。

リリーの自己治癒力の補助をしている。

レアスキル

『オーバーリミッツ（OVL）』

一時的に魔力を無限にする。

解除された時に一気に反動が来てしばらく動けなくなる。

デバイス

ベルカ・ミッド混合式ハイブリッド型インテリジェントデバイス
『レディアント』

特技

スポーツ（特に武道）、歌（歌う時は声帯模写をして歌う）、楽器演奏、スケッチ、家事全般（特に料理）

解説

神が二次創作を書きたいが為に転生させられた少年。

前世での享年は13歳。

前世ではかなり酷い人生を送っていたらしい。

前世についてはいつか語られるかもしれない…

口調は割と穏やかだが、女神様曰く、無理をしているとのこと。
天然のフラグメーカー！

主人公設定（後書き）

デバイス設定（前書き）

続いて、デバイス設定です。

デバイス設定

『レディアント』

ベルカ・ミッド混合式ハイブリッド型インテリジェントデバイス

ジョブチェンジシステムというものを搭載しており、テイルズオブザワールドレディアントマイソロジーに出てくる職業になれる。

バリアジャケットはそれぞれの職業ごとに違い、格好はそれぞれの職業のレディアント装備。

ウォリアー（戦士）

武器は斧

クロスレンジ専用。手数が少ないがそれをカバーできるだけの一撃の重さがある。

フェンサー（剣士）

武器は片手剣

クロスレンジが主流。手数が多分一撃の威力が軽い。

グラップラー（格闘家）

武器はナックル

クロスレンジが主流。投げ技を使える。リーチが短い分手数が多く、敏捷性は高い。

アーチャー（狩人）

武器は弓矢

ロングレンジ、アウトレンジが主流。唯一秘奥義を二つもつ職業。

シーフ（盗賊）

武器は短剣

クロスレンジが主流。敏捷性が高く、相手から物を奪う技を使える。

ウィザード（魔術師）

武器は杖

ロングレンジ専用。遠距離、中距離攻撃にはかなり長けているが接近戦には弱い。

ヒーラー（僧侶）

武器は杖

援護専用。治癒術と補助術に長けている。が攻撃がダメダメ。

レンジフェンサー（大剣士）

武器は両手剣

クロスレンジ専用。攻撃力がずば抜けて高いがモーションが大きく隙が大きい。

デュアルフェンサー（双剣士）

武器は片手剣と短剣の二刀流

クロスレンジが得意。手数がかなり多く、隙が少ないが、その分一撃が軽くなっている。

ガンマン（ガンマン）

武器は2丁拳銃

クロス、ミドル、ロング、アウトどこでもうまく立ち回れる万能型。

モンク（モンク）

武器はナックル

クロスレンジが得意。リーチが短いが敏捷性がある。治癒術も使える

る。

セージ（ビショップ）

武器は杖

ロングレンジ専用。広域攻撃に長けており、
治療術や補助術で援護もできる。

マジックフェンサー（魔法剣士）

武器は片手剣

クロスレンジ、ロングレンジどちらにもうまく対応できる。治療術
も使える。

ニンジャ（忍者）

武器は片手剣

クロスレンジが得意。敏捷性が高く、トリッキーな攻撃が多い。

パイレーツ（海賊）

武器は短剣と拳銃

クロス、ミドル、ロング、アウトどこでもうまく立ち回れる万能型。
トリッキーな攻撃が多い。

パラディン（聖騎士）

武器は両手剣

クロスレンジ専用。治療術や補助術にも長けている。

デバイス設定（後書き）

こんな感じのデバイスになりましたが、作者の実力では全ての職業を使いこなせないと思います。すみません。

第0話 「神って意外とフリーダム」(前書き)

どうも、枯れた樹海です。

記念すべき初投稿です。

駄文ですが、よろしくお願いします。

第0話 「神って意外とフリーダム」

「貴方には転生してもらいます」

僕は今、辺り一面真っ白な空間に先ほど訳の分からないことを言いだした神と名乗る若い女性と向き合った状態にいる。

この人、頭のネジ何本が取れているんじゃないのかな？

「取れてません!!」

心を読んだ!?

怖っ!! 読心術とか…この人絶対人間じゃないよ…人の皮を被った化け物だよ…

「化け物じゃありません!!」

また読まれた!?

やっぱりこの人化け物だよ…僕を騙して食べる気なんだよ…

「食べません!!…とにかくこのままじゃ話が進みませんからふざけるのは程々にしてくださいね」

はい

で、何で転生なんてしないといけないの？

「それはですね…なんといいですか…そのですね…」

何吃ってんのさ、はつきり言いなよ

「実は…最高神ゼウスに…」

『僕、転生物の二次創作書こうと思つとるから、そのモデルとして、適当に死んだ奴の中から1人選んで、そやつに好きなだけチートな能力を与えて、リリなの世界へ転生させてくれ』

…と言われまして…」

神様ってフリーダムなんだね…

「すみません…」

別にいいよ、もう一度人生をやり直せるんだし…
それで、リリなのって何？

「知らないんですか？貴方の世界ではアニメが放送されていましたよ？」

あ、そうなんだ…

僕ってアニメとかそういうのに疎いから…

「そうなんですか…でもそれじゃあ能力とか決める時に困るんじゃないかな？」

確かにそうだね…

あつ、でもティルズだけはしてたから、その『術技、秘奥義を全て使える』とかでいいんじゃないかな？

「そうですね、一つ目の能力はそれにしましょうか…」

「一つ目って事はまだ他にも考えた方がいいのかな？」

「なるべく超が付くくらいチートな転生者にしろと言われていたもので」

「うーん…そうだねえ……」

「じゃあ、『前世の僕の身体能力とか知識とか内面的要素を転生後も引き継げる』ってのは？」

「確かに貴方の場合はそうすると結構チートな能力になりますね」

「そうでしょ？」

「あとは『努力さえすれば何処までも実力が伸びていき、それに限界がない』とかもつけければ結構なチート能力になるんじゃないかな？」

「貴方意外と真面目に考えているんですね」

「まあねー」

「で、能力はこれくらいでいいかな？」

「これ以上思いつきそうにないし…」

「そうですね。では能力はここまでにして、次は貴方のデバイスを考えましょう」

「デバイス？」

「そういえば貴方はリリカルなのはを知らないんですね」

うん、だから先にその世界のことを簡単に教えて欲しいんだけど…

「分かりました。…リリカルなのはというのはですね……………」

〈説明中〉

へえ、魔法なんて存在するんだ…

それに、世界がいくつも存在するなんて…

何かちょっと信じられないよね…

「とにかく、今説明したように魔法を使うにはデバイスというものが
必要なので、どんなものかいいか考えてください」

うん、そうだなあ…

〈数分後〉

……………つとまあ、こんなのでどうかな？

「まあ、いいと思いますけどこれではテイルズに出てくる術技、秘
奥義を全部は使えないのでは？」

いいよ、別に。

どうせ全ての術技とかを使いこなせる訳がないし…

「確かにそうでしょうけど…」

まあ、ゼウスさんがこれじゃ物足りないって思うんだったら、好きに能力を付け足すなり、他のデバイスを作って届けるなりでいいよ。

「分かりました。デバイスは出来上がり次第貴方に届けます」

うん、お願いね

「ではそろそろ転生してもらいましょうか…」

あつ、後一つだけいいかな？

「なんででしょう？」

あのさ、『前世の身体能力とかを引き継げる』って言ったけど、不幸体質だけは引き継がないでもらえるかな？

「……………ええ、分かりました」

ありがとう。

じゃあ、転生させてもらえるかな？

「分かりました。では、新たな人生を思う存分楽しんで下さいね」

うん。

光が僕を包んでいく。

次の人生はどうなるのかな…？

僕は二度目の人生にたくさん期待と少しの不安を持ったまま、一度意識を手放した…

第0話 「神って意外とフリーダム」(後書き)

いきなり駄文でしたね…
すみません

初めて書くのでこんなので良かったのか不安です…

第0・5話

「最高神登場？」（前書き）

今回はほぼ会話だけです

しかも、自分で書いててよく分からない展開に…

第0・5話

「最高神登場？」

「終わったのう」

先ほどまで少年がいた空間に1人の老人が現れて少年を転生させた女性の神に声をかける。

「ええ、それにしても少し心配ですね…」

「何がじゃ？」

「彼が転生して普通の生活を送れるかどうかです…前世の記憶を見ましたが、あの様な人生を送ってきた者が転生しても、普通に生きられないんじゃないかと…」

「まあ確かに、あやつの前世は酷く残酷な物じゃったからのう…じやが儂は大丈夫だと思っぞ？」

「何故ですか？」

「それは内緒じゃ」

「なっ、教えて下さいよ…」

「じゃあ、ヒントを出してやるから自分で考えるんじゃない」

「わ、分かりました…」

「じゃあヒントを出すぞ……ヒントは『家族』かのお……あとは『仲間』や『絆』、『想い』とかもヒントにはなるかのお」

「うーん……分かりませんね……ちょっと考えてきます」

「分かったら僕の所に言いにくるんじゃ。答え合わせをしてやるからのお」

「分かりました。では失礼します」

「……ふう、僕も少年のデバイスの作成にかかるとするか……しかし、あやつ能力は何じゃ!? 全然チートではないではないか! ……まあ、勝手に能力を与えてもよいといわれたし……早速能力を追加してやるか……しかし、何にしようかの……『王の財宝』にしようかのう……いや、それじゃとあやつはチートすぎるとかいつて使わなさそうじゃし……よし! あやつは死ぬことが理想郷』を埋め込んでやるう! ……これであやつは死ぬことがほぼ無くなったのう……フッフッフツツ我ながら名案じゃのう! ……」

こうして少年の知らないところで少年はチート化されていくのであった……

第0・5話

「最高神登場？」
(後書き)

今回も駄文でしたね。
すみません。

第1話 「望み」(前書き)

今回は短めです。

第1話 「望み」

はやてside

— 汝よ、家族は欲しくないか？

なんやこの声…

— どうなんだ？

欲しい…

— ならば望むがよい、汝の望みが強ければ望みはかなう

それほんまか？

— 我の言葉に嘘はない

そうか…

家族が欲しい…お願い…お願いや！！うちに家族を…！！

— ……

1人やと寂しいから！辛いから！だから…！！

— …… 汝の望みは叶った。楽しみにしておくがよい

「夢…？」

はあ…訳の分からん夢見てもうた…
それにしても何やったんやろか…

「っと、朝ご飯つくらんな」

気持ちを切り替えてキッチンのあるリビングへ向かった。

「え……」

リビングに入った時に目に入ったのは宙に浮かんで眠っている女の子。

「も、もしかして……」

—— 汝の望みは叶えてやった

「や、やっぱり…ありがとう、ありがとうな…」

今日の夢の出来事は嘘やなかったんや…!!

—— 汝に幸多からんことを

「この子がうちの新しい家族……」

めっちゃ嬉しい……

こんなことがあるなんて奇跡としかいいようがないけど、ほんまに嬉しいわ……

「この子がいつ目え覚ますか分からんから朝ご飯でも作っとくか」

うちはこの子が目え覚ますのを楽しみにしながらキッチンへ向かった。

第1話 「望み」(後書き)

かなり無理やりだったような気がします。主人公は八神家に仲間入りすることになりました。
なので、無印編は介入するつもりはありません。

第2話

「自己紹介」(前書き)

第2話

「自己紹介」

「ん……………」

「ここは？」

ああ、そつだ。僕は転生したんだつた。

で、ここは何処なんだろう？

とりあえず起きあがってみる。

すると…

「あー！！起きたん！？おはようさん！！」

車椅子を器用に動かして朝ご飯の準備をしている女の子に声をかけられた。

「え、えと……………おはよう……………ここは？」

「ここはうちん家や！！」

「そつなんだ……………」

なんでこの子、朝からこんなにテンション高いんだろう？

「落ち着いた？」

女の子は僕が男だと伝えた後、十分ほど暴走しました。

まあ、大変でした…

アソコを見られそうになったり、見られそうになったり、見られそうになったり…
とにかく大変でした…

「あ、うん。ごめんな？取り乱して」

「僕は気にしてないから大丈夫だよ。えーっと…」

「ん？どうしたんや？」

「いや、そういえばまだ名前を聞いてなかったなあと思って」

「そういえばそうやったなあ…うちの名前は八神はやてや、よろしゅうな」

「えっと、僕はリリィ・ナイトメアっていいましゅっ…あう…噛んじゃった…と、とにかく、これからよろしくね？えっと…はやて

お姉ちゃん?」

あうあう…嘸んじやったよ……
めちやくちや恥ずかしいよ…

「あれ?どうしたの?お姉ちゃん」

お姉ちゃんがワナワナと震えている。
何か嫌な予感しかしないんだけど……

「か…か…」

「か?」

「可愛い…可愛い…可愛い…可愛い…可愛い…!」

「ふにやあああああああああ!」

嫌な予感的中。
いきなり襲われました。

「ハアハア…可愛いすぎるでリリイ。お姉ちゃん我慢できんわ…ハアハア」

「お、落ち着いてよお姉ちゃん!何か怖いよ!」

このあとお姉ちゃんが落ち着くのに30分近くかかった……

ん？僕？何もされてないよ？

第2話

「自己紹介」(後書き)

途中から自分でも何がしたいのかわからなくなりました。
すみません…

第3話 「デバイス登場」(前書き)

今回はリリイのデバイスが登場します。

今回はいつも以上の駄文ですが見ていただけると幸いです

第3話 「デバイス登場」

この世界に転生してから5日たった。

またここか…

僕は今、転生する直前にいた真っ白な空間にいる。

あれ？僕の寝てたはずなんだけどなあ…

もしかして寝てる間に心臓マヒとか？

「ちがいますよ」

あっ、貴女はあの時の女神さん。

「はい、お久しぶりです」

久しぶり〜

で、どうしたの？

もしかしてデバイスができちゃったりしたの？

「はい、そうです。何で分かったんですか？」

えー？だって前にデバイスができしだい届けますって言ってたじゃん

「そついえばそうでしたね」

で、新しいデバイスってどんなの？

「これです」

あれ？これってマイソロ2のニアタだよな？

「はい、そうです。これが貴方のデバイスの待機状態です」

へえ、これが待機状態なんだ…

.....

ねえ、これってどうやって起動するの？

「知らないんですね」

そりゃそうだよ

だって僕リリカルなのは知らないんだもん…

「そうでしたね…忘れてました……とりあえずマスター認証とデバイス名称の登録をしてください」

どうやってするの？

「それも知らないんですね…じゃあカンペ用意しましたからその通りに進めてください」

りょーかい

えーっとなにになに…

マスター認証

リリイ・ナイトメア

我がデバイスに固有名称を授ける
名称【レディアント】

《マスター認証完了……固有名称登録完了……よろしくお願ひしますマスター》

うん、よろしくね？レディアント

「よし、じゃあ試しにセットアップしてもらいますがセットアップの際にジョブの指定もしてください」

うん、じゃあ行くよレディアント、セットアップ・ウォリアー

《set up》

おお、格好が変わったよ…

これが僕のバリアジャケットかあ…
それにしても…
ねえ、女神様。

「何でしょうか？」

何でバリアジャケットが女物なの？

「えーっと…ゼウス様の趣味です…」

やっぱり…

てことは他の職業も…

「はい、女物です…」

はあ…

「申し訳ありません…」

いいよ、もう…

…あれ？僕の体薄くなってない？

「もうそろそろお目覚めになられる様です」

へえ…じゃあ今回はここらでお別れってことかな？

「そうですね。…そういえばゼウス様から伝言が…『お主の身体に
アヴァロンを埋め込んで置いたから、大いに役立てるがよい』との
事です」

え？ちょっと待って…アヴァロンって何な…

「の……………」

しまった！聞きそびれちゃったよ…orz

うん…アヴァロンって何なんだろう？

「ねえ、レディアントは何か知ってる？」

《いえ、私はなにも…》

「そっか…まあ、それは置いて、これからよろしくね？レディアント」

《こちらこそよろしくお願ひします。マスター》

第3話 「デバイス登場」(後書き)

後ほど主人公設定とデバイス設定を投稿します。

第4話

「特訓開始？」（前書き）

今回は説明回みたいな感じになりました…

第4話 「特訓開始？」

レディアントが僕のデバイスになった次の日から僕は特訓を始める事にした。

理由は『守るため』

唯一の家族であるお姉ちゃん、これから出来るであろう友達や仲間、恋人など大切な人を守るために自分の力を使いたい。

まあ、これは前世でグレイセスをした時に思った事なんだけどね。

とりあえず、お姉ちゃんには「お姉ちゃんを守れるくらい強くなりたいから」って言ったら特訓の許可を貰った。

あとの問題は練習場所。

戦士とか剣士は森とかで結界を張れば大丈夫だろうけど、魔術師系はな……ビッグバンとか使ったら尋常じゃないくらいの被害がでそうだし……

悩んだ結果、レディアントに相談してみると《私が張る結界には結界解除時に結界内を修復させる機能がついておりますので、被害を結界内におさめられる術や技なら特訓可能ですよ》と言われたから

近くの森で特訓する事にしました。
ていうか、レディアントももっと早めに言ってくればよかったの
に…

「ふう…とりあえず、ウォーミングアップでもするか」

森についたからウォーミングアップをする事にした。
軽くランニングをしてから柔軟をする。

「じゃあ、さっそく始めようかな…レディアント、セットアップ・
ウォリアー」

《set up》

今の段階での目標は戦士や大剣士、聖騎士などの武器が大きく攻撃
速度が遅い職業は高速戦闘ができるように、特に大剣士と聖騎士は
両手剣を片手で扱っての高速戦闘ができるようになるのが目標。

次に剣士や盗賊、双剣士などの武器を使う手数が多い攻撃が売りの
職業はとにかく一撃一撃の威力を高める事が目標。

次に格闘家とモンクの体術を扱う職業はいつでも相手の懐に何時で
も入れるように、最高速度と最低速度の差を大きくする為、敏捷力
を高める事が目標。

次に狩人やガンマン、海賊などの飛び道具を使う職業は、とにかく
デバイスのサポートなしでも的の中心に百発百中で当たるような正
確性が目標。

最後に術を使う職業は、詠唱なしで術を使えるようにする事が目標。特に前衛で戦うタイプの職業で術を使うなら詠唱破棄は必須だからね。

目標も立てた事だし目標を達成できるように頑張らないとね。

「よし、レディアント、特訓開始だよ？」

第4話

「特訓開始？」

（後書き）

終わり方が微妙ですね…

第5話

「翠屋へ行く」

(前書き)

第5話 「翠屋へ行く」

特訓開始から2か月ほどたった。

特訓の方はかなり順調に進んでいる。

目標の8割ぐらいまでは力が付いたかな？

今日は僕の誕生日。

因みに明日はお姉ちゃんの誕生日。

一日違いだし今日二人まとめてお祝いしようってことになった。

僕は今、最近人気の翠屋というお店にケーキを買いに向かっている。

初めはお姉ちゃんと二人でケーキを作るってことになっていたんだけど、今日病院があることを思い出して断念した。

「……………どこ何処だろ？」

只今、絶賛迷子中です。

一回近くを通ったから大丈夫だと思っていたのが間違いだっただね。

レディアントを置いてきちゃったのも失敗かな…

「それより、これからどうしょ…」

実は帰り道も分からなくなりました…orz

「うう〜…どっなのじい〜……」

やばい…泣きそう……

「What's the matter?」

「ふえ?」

泣く寸前のところで急に声をかけられたからそちらの方へ向くと金髪の子を先頭に3人の女の子がいた。

「え、えと…あの…翠屋っていう店に行く道が分からなくて……」

side out

なのはside

私がありさちちゃんとすずかちゃんと一緒に帰っている途中、道の真ん中でキョロキョロと周りを見回してる金髪の女の子を見つけたの。

「ねえ、アリサちゃん、すずかちゃん、あの子どうしたのかな？」

「さあ？あの子からして迷子にでもなったんじゃないの？」

「私もそう思う。あの子こころ辺じゃ見たことのない顔だし……」

「迷子なんだったら、助けた方がいいんじゃないかな？」

二人に聞いてみたらそうしようということになったの。

「でも、どうするの？あの子多分外国人だよ？」

「あ、そうだったの。私英語話せないの」

「ふふふ、それならあたしに任せなさい」

そういえば、アリサちゃんってハーフだったっけ……
忘れてたの……

「とにかく行くわよ」

「うん」

アリサちゃんが女の子に近づく。

「What's the matter？」

「ふえ？……え、えと……あの……翠屋っていう店に行く道が分からなくて……」

この子日本語喋れたんだ………ってそこ私の家の店
なの？

side out

僕は今、なのはさん、アリサさん、すずかさんと一緒に翠屋に向か
っている。

ちなみに、名前は3人の会話から判断した。

なんでも、なのはさんの家族が経営しているらしい。

「ここだよ」

お、着いたみたい。

へえ、ここが翠屋かあ。

「ただいま」

「おかえりなさい、あらその子は？」

なのはさんそっくりな女の人がでてきた。

なのはさんのお姉さんかな？

「さっき道で迷子になって……うちに用事があるみたいだよ」

しばらくして店員さんがケーキを箱に詰めて持ってきた。
お姉ちゃんの時みたいに暴走した三人は、落ち着いたあと、お喋り
するために三人で店の奥の席へいったみたい。

「はい、どうぞ。誕生日おめでとう」

「ありがとう」

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「はい」

こうして僕はお姉ちゃんを迎えに行く為、翠屋を後にした。

第5話 「翠屋へ行く」(後書き)

早いですが、次はヴォルケンリッターとの邂逅になると思います。

閑話 「新たな転生者？」（前書き）

今回はやっぱりちゃったぜって感じの話です。

閑話 「新たな転生者？」

「ここは……？」

私は確か……

「おお、来たか」

思慮に耽っていると、突然目の前に老人が現れた。

「貴方は……？」

「儂か？儂は神じゃ」

神？

この老人は何を言っているんだと思ったが、聞きたいこともあるので話を進めることにした。

「それで、神様にお聞きしたいのですが、ここは何処でしょうか？それに私は死んだ筈では……」

「ここは何処かか……名はないのじゃが、強いて言うなら転生の間とでも言おうかのう……」

「転生の間？」

「ああ、転生の間じゃ。ここは特殊な転生をする者が来る場所じゃ。ちなみにここへはお主が死んだ時に儂がよんだ。」

なるほど、やはり私は死んだのか…

「それで、特殊な転生とは？」

「ああ、本来なら前世の記憶を消し、元の世界で赤子からやり直すのじゃが、今回はかなり特殊でのお、前世の記憶を持ったまま、同じ姿で別の世界へいつてもらう。まあ、簡単に言えば今の状態で別世界に移動してもらったことじゃ」

「はあ、しかし何故そのようなことを？」

「それはのう…まあ、あるやつを助けてやって欲しいのじゃ」

「助ける、ですか？」

しかし、何故私が？別にそんなことは誰にでも出来るのではないのだろうか……

「いや、僕はお主じゃから頼むんじゃよ。セイバー、いや、アーサー王かの？」

「！？何故私の名を！？」

「何故って言われてものう、お主をここへよんだのは僕なんじゃから知っててもおかしくはないじゃろう」

あ、確かに……

「それで、頼まれてくれるかのぉ」

「私は構いませんが、いったい何をすれば良いのでしょうか？」

「お主にはユニゾンデバイスというものになってもらい、リリイというものを支えてもらいたい」

「そのリリイと言うものがあなたが助けて欲しいといった者ですか？」

「ああ、そうじゃあやつもお主とは少し違うが特殊な転生をしておつての、前世の記憶を持つておる。それであやつの場合前世では酷く残酷な人生を送つておつてのう、そのせいか酷く心が脆い」

「それでは、その者の心が壊れないように支えればよいのですか？」

「そうじゃ」

「分かりました」

「それでは、そろそろ転生させるぞ」

私を光が包み込んでいく。

次のマスターはどんな方なのだろうか…
シロウのような方だといいな…

side out

神side

「ふう…行ったのう」

まあ、転生させる理由はあんな感じでもよかったかのう。

「まあ、実際は面白そうじゃったから転生させたただけなんじゃけどなWWWWW」

どうなるか楽しみじゃWWW

閑話 「新たな転生者？」（後書き）

本物セイバーだしちゃいました。

同じ容姿のキャラがでてきたら面白そうじゃね？とか思ってたやっちやいました。

Ave1様から感想第一号を頂きました。

初めての感想だったので喜びで異様なほどテンションが上がりました。

ありがとうございます。

感想や評価、ご指摘などがありましたら宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6276x/>

僕の知らない世界にて

2011年10月19日12時08分発行